内観ニュース
第21号
発行所
日本内観学会
〒565
大阪府吹田市山田丘1－2
大阪大学人間科学部
教育心理学研究室

村瀬孝雄先生の『日本心理臨床学会賞』受賞記念講演

素直と清々しさへの道

―内観研究三十年を振り返って―を聴いて

村瀬先生ご夫妻のこと

昨年九月、村瀬孝雄先生に、日本心理臨床学会より学会賞が授与された。これはフォーカシングの研究と、内観療法の理論化と国際化に貢献されたことに対して贈られたものである。このことは日本内観学会にとっても大変名誉なことであり、村瀬先生のご尽力に心よりお礼を申し上げたい。

その受賞記念講演を五月二十三～二十五日昭和薬科大学に於いて開催された第二十回日本内観学会大会でお聴きできる予定になっていた。

ところが村瀬先生は病気の為に体調を崩されて大会に出席できず、代わりに、録音テープに吹き込まれた声が会場で放送された。

録音テープを拝聴するに先立って、村瀬先生の奥様で大正大学教授の村瀬嘉代子先生が挨拶された。私には村瀬先生ご夫妻について印象深い思い出がある。それは今から三年前、ウィーンで開かれた第二回国際内観会議に先生ご夫妻と同行させていただいた時のこと。嘉代子先生はいつも孝雄先生より半歩下がって寄り添っておられ、他人に孝雄先生のことを話される時には、「主人は…」という表現をしておられたことである。

今年、嘉代子先生が七百人近い会員を擁する東京臨床心理士会の会長に選出されたことを知った時、私は思わず「日本もまだまだ捨てたものじゃない！」と独り合点してしまった。

内観を支えるもの

嘉代子先生は挨拶の中で「内観面接者が深々と畳に頭をつけて挨拶をし、合掌しておられる。こういう状況というのは沢山ございます世の中の心理療法の中で、恐らく他にございません」と話され、吉本伊信先生ご夫妻の生き方に言及された。そして内観というのは学会等ではあまり研究対象として取り上げられることのない、そうした表に出ない深い大きな行いによって支えられているのではないかと語られた。

孝雄先生が内観を体験されてからは折りに触れて小さなことでも有り難うといわれることが非常に多くなられたとのこと。それから、まだこれからいろんなことをやろうという途中に病を得て、随分、生活を縮小しなくてはならなくなってからでも、このことによって、生死の危ういところをさまよったことで自分はいろんなことを気付いて有り難いと言われ、どうして自分は病気になったということを一つも言われず、「内観とのかかわりによって自分の人生は非常に深く豊かになり、又、いわゆる研究をして行く時にも別の角度から考えが深くなることができて本当に感謝している」と申しておられる由。

出会い

孝雄先生のお話は内観との出会いから始まった。一九六七年、先生が中野刑務所へ週に一回受刑者の面接に通っておられた時、その受刑者から内観のことを聞かされたとのこと。

故吉本伊信先生が普通の人が近寄りたがらない刑務所へ内観を導入されたのが、一九五四年。それ以来、東奔西走の活動をされて、十三年目にして村瀬先生との御縁が出来たのだ。

更にその十一年後の一九七八年、内観学会が発足し、孝雄先生は学会長に就任された。村瀬先生は「この学会ができたことで、それまでバラバラに皆さんが経験しておられたことが持ち寄られて、少なくとも臨床実践の成果というものが蓄積され、組織化されて行く中心的な役割を学会が果たすことができたことは非常に意味深いことだった」と回顧された。

今後の課題

一、内観理解の上では、すぐれた実践家であった石田六郎先生の臨床と見解は貴重である。ただ石田先生の著書はいずれも絶版になっていて普通の人は読む機会が失われかけている。これを何かの形で是非一人でも多くの方に読んでもらいたい。そこから今後の内観研究の一つの方向が見えてくるかも知れない。

一、いろんな内観実践の事例、内観を病院などの大きなシステムに組み込んで行った体験の報告、適応症例の報告等が蓄積されて来た。それから、内観には向かないと思われていた症例に対しても仕方によっては、それなりの成果があらわれる場合があることも臨床的には非常に意味のある報告だ。

内観の効果についても既存のテストを使ってそれなりに成果は得られている場合が多いが、起こっている状況に即した方法の開発がほとんどないという面が残念だ。

一、なぜ効くのかということについては、かなりの発表が行われているが、どうももう一つ…。内観理論をどうやって構築していくかということが現在でもまだまだ本質的な大きな課題ではないか。

一、方法としての内観の特徴を簡潔にあらわす見方として『御破算（ごわさん）とお任せの構造』ということを最近考えている。御破算というのはソロバンのごわさんのこと。これは内観理論を組み立てて行く一つの足掛かりに使えるのではないか。

一、国の内外で既に内観のバリエーションが起きている。それはそれで意味があるかも知れないが、やはり本来の内観はそうではないということをしっかり確認しておく必要があるかも知れない。

一、内観はダイヤモンドの原石のようなもので、若い人はもっと積極的に内観研究に挑戦してほしい。その場合、今までのように研究者と実践家がバラバラに動いているのはよくない。両者が連帯して行くことが大事だ、と今後の課題を提起された。

（文責　長島正博）

第二十回 内観学会に参加して

春日井市立中部中学校教諭 伊藤 聡

私の学校では週に二度、スクールカウンセラーによるカウンセリングが行われています。その関係で内観学会に誘われたとき、内観と言う言葉すら知らなかった者が、のこのこ出かけて行ってよいものか迷いました。

今年から不登校の生徒や、教育相談を担当することになった私は、それまでの生徒指導から離れて、専門外の分野で、何をどう考え行動すればよいか悩んでいたこともあり、何かヒントを求める思いで参加させていただきました。

内観を基に、様々な立場の方が熱心に討議する姿に感動し、内観の一部を理解することができたように思います。研究発表や講演から、自分の視野を広げるためにも大いに勉強になりました。また、村瀬孝雄先生の奥様が話された中に「足るを知る」と言う言葉が印象的でした。会を通じて話をしていただいた方々から、一様に伝わってくる、人間としての温かさや、奥行きの深さはこの事なんだと感銘を受け、私もそうありたいと思うようになっていました。時間的な制約から、疑問点を整理することはできませんでしたが、解決の糸口は色々な所にあるように思いました。

三日間の日程が終了した後も、疲労感よりも晴々とした気持ちで何だか力が湧いてくるようでした。

会を運営していただいた皆様に感謝するとともに、これからの発展を心から願うものです。

初めて内観学会に参加して

鳥取大学医療技術短期大学部教授 引野裕子

雨にぬれた新緑がひときわ美しい季節に、初めて内観学会に参加させて頂きました。

過去十九回の蓄積の重さを感じて初心者は少し戸惑ってしまいました。多年にわたって一筋に実践されている方、内観によって心の安らぎと生きる希望を得られた方々の全国学会であることを痛切に感じました。

講演はもちろん、体験発表、研究発表を通してまさに今回のメインテーマ「内観が拓く心と体」が学会の目標であり、志向性であることがわかりました。

活発な質疑応答が行われましたが、ほとんどの質問者が発表者の意図を理解し、研究の結果得られた結論を尊重されており、発表の意義を一層深めるものであったと思います。他学会で時にみるような演者が壇上で立ち往生しかねないような場面を見ることがなく心温まる学会であったことが印象的でした。

日本内観学会の会長就任のごあいさつ

指宿竹元病院　竹本隆洋

本学会は昭和五十三年（一九七八）六月に京都で第一回大会が開催されてから、すでに二十回を重ねた歴史のある学会に成長してきました。

第一回大会より現在まで村瀬孝雄先生（学習院大学）が学会長として献身的に育てあげてくださったという歴史でもあります。村瀬先生は昭和四十二年（一九六七）吉本伊信先生のもとで内観を体験して以来、内観研究に踏み出し、今年で三十年にもなります。その間、立教大学教授、東京大学教授を経て現在の学習院大学教授として研究と教育に携わってこられました。そして平成六年（一九九四）には国際内観学会が正式に組織されて、その第一回大会がオーストリアのウィーンで開催され、村瀬先生は国際内観学会会長に推挙されました。そして昨年は先生の内観研究の集大成とも言うべき労作「内観　理論と文化関連性」という著書を誠信書房から世に出され、これまでの先生の業績に対して「日本心理臨床学会賞」が授与されました。

村瀬先生の後任として、この記念すべき第二十回本学会において、私が新会長に指名されて就任することとなり、身に余る光栄に感謝するとともに、その重責を改めてひしひしと感じている次第です。もとより浅学非才、微力でありますが本学会会員の皆様のご支援をいただきながら本学会のさらなる発展と我が国の精神保健や精神医療の発展のための一翼を担って、わずかでも貢献できるように力を尽くしたいと考えております。

今や本学会は人間に例えるならば成人式を迎え、次のステップへ飛躍の時期にさしかかっております。このような時に、来年五月の第二十一回大会では「森田療法と内観療法」をテーマにシンポジウムが企画され、森田療法学会から二人のシンポジストが登壇して、内観学会の二人のシンポジストと討論する準備が進められています。すでに、本学会は内部だけで試行錯誤を繰り返す段階から他の学会や他の心理療法と対等に肩を並べて立派に市民権を得て一人立ちするに十分な期が熟してきたと言えましょう。今後は他の学会との他流試合を積極的に推し進めながら、外から見た内観のイメージを参考にして研究の糸口とするとともに、一方では外の研究者に内観への関心を高めてもらうという効果も少なからず期待できるのではないでしょうか。このような意味で内観に関する研究業績を今まで以上に積極的に他の学会で発表したり、他の学会誌への投稿にも力を入れることが重要な作業であると思われます。しかしながら、この学会内部の会員の親睦が何よりも大切であることは言うまでもありません。お互いに切磋琢磨して本学会の発展にご協力いただき、さらに内観普及のための活動もさらに活発になることを期待しております。

国際内観イタリア会議だより

第三回 国際内観会議の 一～二日目の印象記

ローマ空港に時差八時間で夕方五時に着き、翌日曜日ヴェニス最大のお祭りレガッタ競漕を見せて貰った。会場の修道院に着いたのは二十二時。満天の星が手に取れそうに近い。三世紀に建てられた世界最古の修道院に泊まり、これからの五日間の会議のために滞在すると思うと緊張と幸せとが入り混じった思いにつつまれた。

大会一日目、G・フェルダー会長さんの開会の辞、楠先生のご挨拶、石井先生の基調報告があり、多少のプログラムの入れ替えはあったが、スムーズに会は運ばれた。平山さんの体験発表があった。南チロルの澄み切った風の中で、風の様な速さで和服に着替えてこられた彼女の姿がとても印象的だ。こちら側の発表は午前中で終了。午後は修道院見学、修道院内の図書館にあった世界一大きい本と、世界一小さい本などに驚かされる。午後はテーマ「価値」について、リッターさんの司会でドイツ語、日本語のグループに分かれてワークショップが行われた。

二日目、抜けるような碧い空。一日目に続き晴天。午前九時より「癒し」のテーマで話し合いがもたれ、Y・ハルテルさんの基調報告、次に癒しのプロセスを考えるシンポジウム、ここでは聖人の域に達することで癒されるということで話しが深められた。北海道の上野さんの発表、引き続き代読で二人分の体験発表があり午前中で話し合い終了。午後はF・ガスタイガーさんの案内で「足冷法」（健康法）の為近くの丘までハイキング。途中、日本と同じような草木が目につく。

夜のワークショップでは「価値」についての第二部。自分が内観後、どんなことを「価値」としてとらえてきたか、ひとり一人のメモをもとに分類・集約して討論した。

東の端日本と、西端南チロル・イタリアの内観から得た価値が、全く等質であったことは、人類に内観が必須であることを思わせられて、有難く嬉しいことであった。

（池上 サト子）

国際内観会議の三～四日目の印象記

イタリア北部のブリクセンの町、中世時代に建てられたという古い立派なノイスティフト修道院に於ける五日間の内観国際会議に参加させていただいた。各先生方の内観に対する熱意と強い思いを目の当りにし、襟を正される思いがした。一～二日目は「価値」「癒し」のテーマでシンポジウムや発表があり、三日目は私にとって特に印象に残る衝撃的な「ルーツ」のテーマであった。

フランツ・リッター氏の「人間存在のルーツ」の基調報告の後に、木村慧心先生の「内を見ること」の中で、私達は二種類の自分がある。相対的な自分（母・肉体に対しての自分）と絶対的な自分があり、内観者は絶対的な自分を内観の中で見つけ出さなければならないと話された。非常に興味のあるお話の内容で時間の関係で詳しく話されなかったのが残念でした。又、池上先生の「三十五日間内観」の体験発表は、今、ここに座っている自分に意味づけを問うようにおごそかな口調で宿善開発されたお話しに特に迫力を感じました。私自身にとって真剣に生きるとは、厳しさと責任の重さを感じながら、今後の課題を示唆して下さっているようでもありました。途中時間がないという事で端折られたことは非常に残念に思いました。

又、その日の予定外にダライ・ラマ法王にお会いすることが

出来たことも不思議な感じがしました。

私は、今回の国際会議で学ばせていただいた事は、内観面接者としてではなく、内観者として歩んでいかなければならないという事です。そして、今後も沖縄の内観研究会の先生方と内観普及のために私なりのお手伝いをしていきながら、さらに、自己を深めていきたいと思います。参加して本当に良かったと幸せに感じます。

（平　山　恵美子）

国際内観会議の五日目の印象記

五日目は「内観」がテーマであった。高橋正先生は、吉本伊信先生が死ぬまで内観法の技法に改良を加えようとしていた姿勢を受けて、今後とも深い内観に導くための工夫が必要なことを指摘。シンポジウムでは企業における人間性の喪失と自分のものを捨て去ってみて得られた精神的開放感などが語られた。

体験発表ではエイズの患者さんが両親と和解して健康な魂で死んでいったことや二十歳の青年が自動車レーサーとして機械との一体感を獲得できた内観体験やカナダでの内観研修会などをすがすがしく語ってくれた。石井先生は「内観の発展」として、その方向性や本質が失われない範囲で工夫・発展されるべきこと「内観は人類の宝」であり、この会議の重要性を強調された。楠先生は、内観の導入としてのロールプレーを示されて多くの質疑応答があった。G・シュタインケさんは自分の人生と内観について指導者としての気持ちを話してくれた。次回の本会議は、シュタインケさんが会長として二〇〇一年にドイツのハノーバーで開催されることに決まった。こうして一九九七年九月八日から十二日まで五日間の第三回内観国際会議は終了した。

今回のテーマは「価値」「癒し」「ルーツ」「幸せ」「内観」であり、抽象的ではあるが、それだけに深い部分に光が当てられたことを評価したい。日本から二十九人、外国からは内観体験者のみ三十人余りの参加であったが、内観に対する熱意と普及の願いは全参加者に共通のものであった。その暖かい歓迎ぶりと心づかいに感謝しながら「いつまでも絶えることなく、友達でいよう。今日の日はさようなら、また会う日まで…」と歌いながら別れた。九月六日に成田を発って十九日までのイタリアの旅は、まだ途中である。ルネッサンスの街フィレンツェからローマに向けて南下するバスの窓から初秋の空は澄み渡り、オリーブの樹が風に揺られているのが見える。

（竹　元　隆　洋）

〈特報〉『自分史一覧表』
――特許庁に実用新案登録――

高橋正氏（行動内観研修所）が内観研修を効率的に進めるために『自分史の一覧表』を考案したことは、高橋正「行動内観研修における事前在宅研修について（自分史一覧表）」『内観研究』第三号に詳しい。この『自分史一覧表』の実用新案権が本年六月十一日付で特許庁に登録されました。そして、本年九月十四日付で高橋氏より「通常実施権を日本内観学会に無償で提供したい。各地の内観研修所や病院が研修用に、または各会員が個人用に自由に使用して下さい」との申し出がありました。ただし、使用状況把握のため使用するときは、一度だけで結構ですから、文書またはFAXで学会事務局までご一報下さい。

（三　木　善　彦）

〔内観研究〕

アルコール依存症の十二例に対する内観療法について

上海市精神衛生中心　徐鶴定　徐筠　蔡軍
上海第二医科大学精神医学教研室　王祖承　銭澄宇
日本国春日井市ひがし春日井病院　真栄城輝明
日本国大阪内観研修所　榛木美恵子
日本国岡山市慈圭病院　堀井茂男

Key words＝Alcoholism（アルコール依存症）、Naikan therapy（内観療法）、MMPI、Personality Disorder（人格障害）

Ⅰ　はじめに

中国近代化の発展と同時に、生活レベルが高くなってきてお酒の消費量も年々増えつつある。その結果、アルコール依存症の発病率はだんだん高くなってきた。アルコール依存症はすでに社会問題となっており精神医学的にも注目されている。近年中国ではアルコール依存症の疫学関係の研究は多かったが治療についての研究は少なかったようだ。特に内観療法による臨床研究は珍であった。

著者らは二十床のアルコール専門病棟をもち内観専用の治療室を併設している。治療プログラムは三ヵ月から六ヵ月の入院治療期間とし、入院後一ヵ月経過したころに集中内観を一週間実施して見るべき効果をあげている。

Ⅱ　対象と方法

本研究の対象は一九九五年一月より一九九六年四月までに上海市精神衛生中心に入院し集中内観を体験したアルコール依存症十二例で（すべて男性）、年齢は三十～四十二歳、平均年齢三十四、二歳である。

罹病期間は二～十年、平均五、五年で飲酒歴は十～二十一年、平均十四、五年である。

毎日飲酒量：招興酒五〇〇グラムから白酒七五〇グラムまで、純アルコール量に計算すると平均二二七、五グラムである。

飲酒方式：五例はお酒を飲む時、おかずを何も食べない、七例はおかずを食べながらお酒を飲む。十二例の中で二例はアルコール依存症の家族歴がある。

教育程度（学歴）：中学校卒七例、高等学校卒三例、短大卒二例。

職　　業：労働者九例、会社員二例、管理職一例。

婚姻状態：既婚五例、未婚五例、離婚二例。

診　断　別：震顫譫妄型二例、幻覚症型三例、妄想症型三例、人格障害型四例。

アルコール依存症者は入院してまず一ヵ月ほど薬物療法を受ける。

当院のアルコール依存症者は重症例が多いので、まず、身体医学的な治療を行う必要がある事例であった。

入院後一ヵ月経過したころに薬をやめて集中内観を実施する。内観を導入する前ＭＭＰＩ性格検査を施行する。

当院における内観療法は、内観専用の治療室で行なわれ、午前二時間、午後二時間、一日に四時間で行なわれ、一日の面接回数は四回で一週間を通して内観を実施する。

治療環境：静かな内観室に椅子とテーブルだけが置いてある。外界からの情報を遮断する。楽な姿勢で座る。読書や談話、面会を許さない。「して貰ったこと」、「して返したこと」「迷惑かけたこと」という観点から具体的に調べさせる。

MMPI　結　果　(Mean±SD)

MMPI	Alcoholism (n=12)	Control (n=1558)	student−t	P
L	6.40±2.48	5.70±2.52	0.96	〉0.05
F	20.51±7.12	13.68±6.86	3.34	〈0.001
K	12.82±5.75	13.00±4.66	0.13	〉0.05
Hs	10.15±4.56	8.78±4.57	1.00	〉0.05
D	29.25±6.10	26.16±4.97	2.14	〈0.05
Hy	24.73±6.07	22.07±5.36	1.71	〉0.05
Pd	23.82±4.77	18.98±4.36	3.82	〈0.001
Mf	29.03±4.89	27.56±4.04	1.25	〉0.05
Pa	17.06±5.19	12.84±3.92	3.71	〈0.001
Pt	19.54±8.62	17.86±7.93	0.73	〉0.05
Sc	31.60±10.28	23.01±10.15	2.92	〈0.01
Ma	21.77±5.03	18.48±5.26	1.19	〉0.05
Si	36.09±7.37	34.51±6.88	0.46	〉0.05

時間割り：一日目＝小学校前、二日目＝小学校一〜三年、三日目＝小学校四〜六年、四日目＝中学校、五日目＝高等学校あるいは短大あるいは就職前、六日目＝就職後、七日目＝全面的に調べる。

Ⅲ　結　果

1、MMPI性格検査

十二例のアルコール依存症者のMMPIの結果をコントロールと統計学的に比較する。結果は、上記の表に示す。表に示されたように、アルコール依存症のMMPIのPd、Pa、Sc、の三尺度は、コントロール群と比較して統計学的に有意差があった。つまり、アルコール依存症のMMPI分析図は四、六、八という形をとっており、著しい人格障碍が存在している。李平らの研究結果と一致している。

2、臨床効果

十二例のアルコール依存症者は退院前、症状は消失し、情緒も安定しており、再飲酒の意欲がなくなった。そして集中内観を通して、深い感情体験を得て、適切な罪悪感と感謝の念、恩返しなどの気持ちが生じている。「アルコール依存のため、ずいぶん家族に迷惑をかけた」とほとんどの患者は語った。断酒の決意が著明に見られた。

われわれは、十二例のアルコール依存症者を退院後六ヵ月経過したころに予後調査（follow-up）を行なった。結果は、七例は断酒しているが、五例は再飲酒となった。再飲酒の五例の中で、一例は外来で治療を受け続けているが、二例は再入院中。

Ⅳ　考　察

精神療法は長い歴史を持っているが、ここ数十年で、その重要性が公認されてきている。そして、いろいろな研究が盛んに行われている。精神療法は種類が多くて、精神療法で治る患者の数も増加すると予想される。Herink.R によると精神療法の

種類は二五〇ほどある。精神療法の技法には、それぞれ特徴があり、その国の文化や社会的条件を考慮して実施されるとより良い結果が得られることが予想される。

内観療法は吉本伊信によって創始された日本独自の精神療法で、精神医学にも注目されてきている。適応範囲が心身症や神経症、アルコール依存症、人格障害、問題行動など、幅広い。近年、中国でも内観療法を試みる報告がだんだん見られてきた。

アルコール依存症は深刻な社会問題でもあり、医学問題でもある。

アルコール依存症の治療は薬物療法のみでは解決できないと見られている。患者にとって精神療法は極めて肝要である。内観療法は「して貰ったこと」「して返したこと」「迷惑かけたこと」という観点から自己の内に沈潜して、過去から現在に至るまでの対人関係を具体的に観照することによって真の覚醒の状態に達する。本研究の十二例のケースの内観過程からみると、内観前半は、感想の中で、家族に関して「心配・迷惑」をかけたことに気付いたものが多く見られ、後半は、自分に対して「後悔・反省・罪意識」は急激に増加した。それは行動修正に結びついたのではないかと考えられる。

本研究のfollow-upの結果からみれば、アルコール依存症の再飲酒率が低くなかったので退院後、定期的に退院した患者を集めて断酒会とか、集団内観とかという形で指導を続けていく必要があると思われる。

本研究の症例はただ十二例で少ないが、今後は、さらに症例を重ね、アルコール依存症に内観療法を実施して、治療の成果を研究してゆきたい。

訳　張　海　音

謝　辞 ―― 小論を訪中の際にご校閲いただいた日本の高名な精神医学者・小田晋教授に感謝申し上げます。

1．王祖承　内観療法、国外医学精神病分冊、1988：138－141。
2．Grafield SL：Psychotherapy：a 40 year appraisal. Am Psychologist. 1981；36：174－183
3．Herink R：The Pyschotherapy Handbook. New York：The New American Library 1980
4．Beitman BD, Goldfried MR, Norcross JC：The Movement toward Integrating the Psychotherapy：An Overvicw. Am J Psychiatry 1989；146：138－147
5．除鶴定、趙鶴鳴　強迫症の一例に対する内観療法の試み、内観研究、1995；2（1）：1－3
6．除鶴定、王祖承　内観療法在精神科酒依頼者中的応用、中国薬物濫用防治雑志、1995；1（1）：40－41
7．李平、欧阻杏娟、談琳　酒中毒患者明尼蘇達多相人格測査表測試結果的多元分析、中国精神科雑志、1996；29（3）：162－165
8．竹元隆洋　とくに最近の技法的なヴァリエーツョン、臨床精神医学（日）1991；20（7）：1029－1036
9．洲脇寛、堀井茂男　内観療法のエッセンスとバリエーション、臨床精神医学（日）1991；20（7）：1023－1028
10．巽信夫　その心的轉回のしくみと臨床的活用、臨床精神医学（日）1991；20（7）：1015－1021

第二十一回日本内観学会大会のご案内

現代の科学技術の進歩は急速で、私たちの生活文化を大きく変え、物質文明が先行する時勢になっています。その中で、現代人の迷い、苦悩は益々深刻になっているように感じます。残念なことに、物質的豊かさが必ずしも精神的豊かさとは平行しないように思えます。このような時代にあって、静かに己れを省みる『内観』は、人間形成、家庭・学校・職場での精神衛生、そして精神療法として、極めて有用な手法であります。

総合テーマは『内観の科学的進展を求めて』にしました。皆様の多数のご参加をお待ちいたします。

一、会　期：平成十年五月二十九日(金)・三十日(土)
二、会　場：米子コンベンションセンター
三、総合テーマ：内観の科学的進展を求めて
四、大会長：鳥取大学医学部教授　川原隆造
五、事務局：鳥取大学医学部附属病院　心理療法室
　住所　〒六八八三　鳥取県米子市西町三六―一
　TEL　〇八五九（三四）八三五五
　FAX　〇八五九（三四）八〇九七
六、特別講演：「心と体の結びつき ―精神神経免疫学―」
　久保千春（九州大学精神身体医学講座教授）
七、シンポジウム：シンポジウムA「内観療法と森田療法」
　シンポジウムB「仕事と内観体験」
八、参加費：七千円（学生六千円）　部分参加一日　四千円
九、懇親会費：六千円
十、研究発表希望者は研究発表申込書に必要事項を記入の上、早めに大会事務局までお申し込み下さい。折り返し発表論文集原稿用紙を送付いたします。
　研究発表申込締切期限
　　平成九年十二月三十日（当日消印有効）
　発表論文集原稿提出期限
　　平成十年一月三十一日（当日消印有効）

編集後記

第三回の国際内観会議の一員として、南チロルに行って来ました。御一緒した三人の方が原稿を送って下さっていましたが、三人共、学会終了後のバス旅行の途中で一生懸命原稿を書いて下さっていました。やはり、内観をされている方は、責任感が強いと感心させられました。Ⓚ

◆　◆

ニュースは生き物である。本誌が年一回の発行になったことによって、せっかく早々に投稿いただいた原稿が時宜に合わなくなって割愛されたかと思えば、ある原稿は校正の段階まできてニュース性が考慮され、急拠加えられたりした。そんな訳で、本号は、出来上がるまで、今までになく印刷会社はもとより、多くの方の手を煩わすことになった。この場を借りて関係者各位にお詫びとお礼を申し上げたい。Ⓜ

広報編集委員
青山学院大学　石井光
米子内観研修所　木村秀子
ひがし春日井病院　真栄城輝明

原稿の送り先
〒486　愛知県春日井市下原町字萱場一九二〇
ひがし春日井病院内観療法室
TEL（〇五六八）八二―五五〇〇
FAX（〇五六八）八二―〇六九七